

ていねいな暮らしのあつたころ

佐野二彦の撮った伊深の里山



「七夕」(昭和38年8月17日撮影)

「七夕と月見」

昭和30年から40年ごろは、旧暦で七夕をしていました(現在の8月7日)。七夕の前日に家の軒端のきばに笹竹を立て、色紙や短冊をつるして飾り付けをし、ナスやスイカなど、そのときの畑のなりものを盛って、縁側に供えました。

また、旧暦の8月の十五夜(今年は10月3日)と9月の十三夜(今年は10月30日)は、一年で月がい



「月見の供え物」(昭和40年9月10日撮影)

ちばん明るく美しいとされ、月見をしました。8月は「芋名月」、9月は「豆名月」といいました。「芋名月」には、竹で編んだカゴジをふせて、その上に里芋を株のまま一つと皿に盛った小イモとだんご汁を供え、ろうそくをとめます。供え物を置く場所は、家の門先かどきの真ん中でした。

普段の夜なべ仕事はやめて、その日は夜の涼しくなった空気を感じながら、天の川を眺めたり、昇る月を愛でたりすることが、人々の暮らしの中にある時代でした。